

祈り

渡部 和雄

—

祈りは、風に吹かれて、その人にやってくる
風がある限り、祈りがなくなることはない
そう

たえず私は祈られているだけ
愛の顕現である私が（私）

風に吹かれ、そのほかはなるようになっていく私
その恐怖の私
この世の恐怖

知識が恐ろしい

祈りが与えている、この（知識への）恐怖

風の吹かない日、祈りが止んでいる
恐ろしい知識が構造に充ちている

木は（枯ら）になった

（祈られているから私は）在る
奇蹟のように私が在る

なんだろう、この（祈られている者）とは
たぶん

神は愛している人を選ぶ

愛している人、愛されている故に、神に命を預けうる人

愛している故に、その命は神のもの

誰が愛しながら、その人の魂を自らのものにしない者があろう
愛は代償に同じである

神・愛はこうして自らを（存在）させる

人が在るのは、多分、神の顕現なのである

祈りは誰にも分らない

その祈られている人以外には

その人はまた他人のために祈る能力を持たない
心も精神力も何かに領有されてしまっているから
人は麦を育てようとするが

麦は人のために祈ることがない。自分だけが生きている。

祈りは生きて行くことに似ていない

祈られているのは、だから気づいた奇蹟である。

祈りは相手を生かそうとするが

祈られる者は相手を生かそうとしない

相互扶助というのは、人類全体が生きているのは人間の喪失である。

祈られる者は絶え間なく骨身を削られる、恐ろしい強制のように。

削られ、か細く鋭って、やつと生きている。

言葉には自立性というものがあつて、人が第一次生産の中にいる時に現れる。

言葉や文が独立していることが判るのは、たとえば、

麦の穂のように、人が育て、食べる、そんな植物との関係においてである。そこには繊細さというものがある。

麦の穂はものうくて、金を出して買って読むほどの本もない。麦の穂はつまらなくて、寂しいものに充ちて、枯れて麦カラになる。

ホソウ道路が出来て、向かい側の木陰はもう人が腰を下ろして休む所ではなくなった。草の芽のおのき、ホソウ道路の強さ、固さ、重さ、そこは不安定の雰囲気包まれているのに、不安感が漂っているのに、風は近代文明によって起こり、あの知識に似た繊細さもう自分を保持できなくて、緑の木陰では犯罪のように人の心がささくれだっている。

風が吹いてくる 麦の芽

……テレビのように話さないし

新聞のように書かない

麦の穂に光がはじけている

日本語など教えられ、日本語など話せるようになった〈不幸〉

テレビという言葉を書ける不幸

新聞という言葉を書ける不幸

そう難しいことでもなくて

この世（の恐怖）で心も体も萎えてしまった私は

言葉を話すこともなくなつて、被虐のように

麦の穂のようである

麦の穂が言う

ナントマア、人の世にはテレビトカシンブントイウモノガアル

冬が去つて、小雨にかすむ山合の村、吹いてくる生暖かい湿った風。

（そう、私の周りに充ちていたのは、あれは神というものであつた）
麦の穂は人に会うために旅立つことはない。彼は人に会う宿命を持たない。

触れるのは風だけ、風の中の祈りに会う？
時に蝶の飛んでくる時があり

どこかの〈長〉が車で通る時もある
〈長〉は通るだけでも恐ろしい。車が恐怖を漂わせているからそれが分かる。

長が（だから社会的に、集団に）語ることは〈話す〉ことを失っている。
文相が、幼児期から「心の教育を」テレビが話し、新聞が書く。
テレビがはずかしくなつて汗を流すことはなく
新聞がはずかしくなつて汗を流すこともない。
テレビは自殺をしない
新聞は自殺をしない

文相・テレビ・新聞

そこに国民というのも一緒にいて、スモウやサッカーや野球やを楽しんでいる。

歴史や機械が話すのではない、話すとしたら麦の穂が歴史に向かって話してみる。イエスがマリアから生まれたように。十字架上で殺されて復活したように。

麦の穂が歴史に向かって話すような〈祈り〉

この世（相対性社会とか生活）は、人に不幸を用意するためにある。不幸は複数の数字は持たない。不幸とはひとりのことである。

「過去十二年間、わしは伊太利の到るところに於て、もつとも惨めな生活をして来た。わしはあらゆる屈辱に堪へ、あらゆる艱難を忍び、あらゆる困憊を以て自らを苦しめ、そして千百の危難にわが身を曝した。」（ミケランジェロの手紙）

そう、私はあきれほどのテレビ屋（小心者）だから精一杯見栄を張っている。不幸というひとり。他人の幸福は折れない。複数以上のもは私ではないから。

「美しいものが、美しいものという意味の印象を刻し得るのは、ただある人自身の内に、独特な価値すなわち美的価値が、アプリアに備わっている時、ないしはその限りにおいてである。」

（オットウ「聖なるもの」）

アプリアオリというのは田舎出の小心者のこと？不器用なひとりのこと？彼を訪れるのは風だけ。

風は神の便り

何故、何処から、は判らないでも

十万人の不登校児に似ている

原因、理由不明

〈言葉の世界には、不幸の占める場所はない〉（シオラン）

そう歴史は悔恨しない、悔恨は歴史を失ってしまう。

悔恨と被虐と

悔恨と被虐がこんなに嬉しいのは

悔恨と被虐が魂の性質だからだろうか。

その頃、言葉は何かを産むものではなかったか。

「春はすでに終わりと成つてはや初夏の、ものみなは今を盛りと生ひ繁つて、樹々は果実に、野は麦の穂にみちあふれていた」

（『ダフニスとクロエー』——二三 呉 茂一）

文学論にならない文学研究など本性上文学ではない。

「エホバ往古その御業をなしそめたまえるさきに、その道の始めとして我を造りたまいき。永遠より、元始より、地のあらざりしときより我は立てられ、いまだ海洋あらず、いまだ大いなる水の泉あらざりしとき我すでに生まれ、山いまだ定められず、陵いまだあらざりしさに我すでに生まれたり。すなわち神いまだ地をも野をも、地の塵の根元をも造りたまわざりしときなり。……されば小子らよ、いま我に聴け。わが道を守る者は福いなり。教えを聴きて智慧を得よ。これを棄つることなかれ。おおよそ我に聴き、日々わが門のかたわらに候ち、わが戸口の柱の側に立つ人は福いなり。そは我を得る者は生命を得、エホバより恩寵を獲ればなり。我を失う者はおのれの生命を害う。すべて我を悪む者は死を愛するなり。」（旧約 箴言 八）

（我）は存在しないものの堆積であり、私も存在しない堆積であ

る。私が道なのではないか。

麦の穂のようなひとり。(ひとり)はひとりを歩いていく。ひとりが唯一に会う。ひとりがひとりでひとりを……。ないものが始まる。

二度に五秒か六秒しかつづかないけれども……それは明白で争う余地もない感情なんだよ。まるで不意に全自然の存在をありありと感じて、思わず(そう、これは正しいことだ)と口走るような気持ちなんだ……それは愛を超越したものなんだ。(キリーロフ)

二

なんのことはなく、慣れたバスの恐怖、四角横長の箱の恐怖。学校の恐怖、教室の恐怖、質問に身が縮まるような恐怖。

八月六日、原爆の日以来、具体的には兵器によって人間の体が、生存を失って以来、人は情緒にたよるすべを失った。科学兵器という、人間を殺しうる能力に、人間の情緒はその安定性を失った。

殺人兵器を？操作できる支配力の下で、不安に囲まれている。バスも学校も教室も情緒を保護し、安定させてはくれない。恐怖とは宇宙内構造である。そこで人は恐怖に媚び嬌声をあげて生活を許容されている。

殺人兵器による支配秩序はノイローゼを作る。それが逆立ちするとノイローゼを治癒する医者という形に似る。

ノイローゼは支配秩序や医者の外側に、ないものの堆積に似ている。社会制度が変革し、人体は腐蝕し、死亡しても、この堆積は堆積する。知ることにはまたノイローゼに似ている。

バスの窓に麦の穂は写らない。

風を体温によつて言葉に翻訳できる者を預言者というのだろう。

麦の穂の言葉をきけなくなったバスの人々、風も吹かない。そんな言葉は、それは麦の穂の結実までの(いわば農耕的過程の)期間だけであつて、麦をユダヤの(あるいはエレサレムの)都市に運ぶ交易用語とはならない。

都市には麦の穂の話を聞けない人々が育つて来、そうした世界ではこの言葉は死滅している。

宮殿の司、軍隊の司、収税の司、

そこでは組織は正義であつた。

イエスが自らの死滅について話したのは、モーゼとエリアとだけであつた。弟子たちは去つた。

「汝ら人にまじわされぬように心せよ。その日その時を知る者なし。天にある使者たちも知らず、子も知らず、ただ父のみ知つたもう」麦の穂の話を聞ける者はいない。育つ麦の穂の体温に吹く風を聞く者はいない。数秒、数分、

(この世を救うのは、この世の王であつて麦の穂の言葉ではない)そう争いは私の好む所である。

私は、人の秩序を混乱し、迷惑させるためにやつてきた。

この混乱は神に似、この迷惑は美や真に似ていた、そう生物の体温に似ていた。

この世の評論は誰に向かつて話すのか、国民との慣れ合い？

評論という人道主義的なものは、麦の穂を沈黙させる。

預言者においては、エレミアにおいてはエルサレムも滅びるだろう。この世は滅びなければならぬ快感が麦の穂を吹く風にはある。

「なにゆえ、黄金は光を失ひ

純金はさげすまれるのか。

なにゆえ、どの街角にも

聖所の石が打ち捨てられているのか。」

滅びが楽しいほどに預言者、麦の穂の言葉は悲しい。そうこの世に栄えなどありようはない。洪水だつてある。

エレミアも死滅する。栄えも滅びもなんてこの世に似ていることか。

ロゴスへの道はこの世の向こう。言葉はひとり（預言者）にしかやつてこない、神は人々を殺す。そして仲介者（イエス）を殺すまで、人々の救済はない。麦の穂に似るまで、人々に救済はない。麦の穂は人に、美に、真に似ていたから。

「乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように、

この人は主の前に育った。

見るべき面影はなく、

輝かしい風格も、好ましい容姿もない。

彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、

多くの痛みを負い、病を知っている。

彼はわたしたちに顔を隠し、

わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

彼が担つたのはわたしたちの病、

彼が負つたのはわたしたちの痛みであつたのに、

わたしたちは思っていた、

神の手にかかり、打たれたから、

彼は苦しんでいるのだ、と。

彼が刺し貫かれたのは、

わたしたちの背きのためであり、

彼が打ち砕かれたのは、

わたしたちの咎のためであつた。（イザヤ）

そう、なにかあるとしたら（人の死の向こうに）であろう。

（愛がなければ）、そう（どのようなことを語るにしても）……なんにもならない（パウロ）、と感じてみる。

愛？ 麦の穂の体温が風とつき合うようなこと。

麦ちゃん、どこに立つてるの。

植えられた所に。

そこでもいいの。

エス様のいた所も、それで全部だったから。

いえ、文の表ではなく、文が通つた時、かすかにふつと現れるものの。形でもなく、色でもなく、香りでもなく、ないものがあるような、言葉の（ない）底。

二〇〇頁、四〇〇頁、八〇〇頁の本の中で、かすかにふつと抜け出すもの、消えるもの。

ウタ、うた、歌の、歌詞でもなく、音譜でもなく、かすにふつと歌の外に消え出るもの。

タビ、たび、旅の、場所ではなく、日程表ではなく、旅をこぼれ出ているかすかなもの。

二秒、五秒、十秒だったならそれはもう。

靈妙な堆積、高さ三センチ、三秒ほど。それは、この知のようなものは、知りたいことを蒸溜したもの。知のようにならないのはゴミである。

言葉が全部通りすぎて、それとは別の、瞬間のようなものがあつて、言葉の全部とは別に残されるようなもの。

数値になることがないもの、数値のない堆積。いってみれば、（何ものも説明されず、何ものも証明されない、すべては見える）とシ

オランが言うようなもの。

空間と思われるものの中の時間

宇宙と思われるものの中の歴史

日本というものの不思議

平成、平成、平成というへド

私は人間でありながら

人を愛するなどという能力を持たなかった

かえって、人を憎む能力を持った

へまあ、掛け給へなどと天皇のような人には言えない。

どんな意味が書いてあるかではない

意味などというのは、言葉では殆ど無意味である。

日本人の書いた文の不愉快

麦の感ずる不快

麦は本を読まない

成長するものに本は要らない

麦の夢に（何が書かれているのだろう）

空から本が開かれる

宇宙は、宇宙が書いた、無数の本に似ていたが

世はそれを読まなかったし

私にはそれが読めなかった

麦はこの世に目まいしている

私の体温

麦の気温

魚の水温

人の言葉は歴史という秩序が、その故に支配の姿を現しただけであるが、天の本は別な世界を作っている。

人の言葉は支配のようにしか存在しない。

麦が話さないのは生きることに疲れているから

魚が話さないのは生きることに疲れているから

私が話さないのは生きることに疲れているから

麦も魚も私も絶対性なのである

この世はロゴス（言葉の別の世界）への惨虐である

麦の穂が風を受けているということは、

人が（例えばゾシマ長老が）自然を感じているのとは違う。

『兄の部屋の窓は庭に向かって開いており、庭には蒼然たる樹木が翳くらく生い茂って、枝々にはもう春の若芽が脹らみかけていた。季節には早すぎる小鳥達がもう飛んで来て、窓さきから兄に向かってさかんに囀ったり歌いかけていた。ところが兄は、その小鳥たちを、さも懐かしげに眺めているうちに、突然彼等に罪の赦しを乞い出したのだ。『神の小鳥たちよ、お前達も私を赦しておくれ。この私はお前達にも罪深い人間なのだ』このような言葉に至っては、その頃私達一家の誰一人としてその意味を解し得るものはなかった。ところが兄は歓喜のあまり泣きながらこんなことを口走るのであった。『そうだ、私のまわりを、こんなに神の栄光が取り巻いていたのだ』』（カラマーゾフ）

「もうおしまいです。御子息は精神錯乱に陥ってしまったました」と医者という。この医者は世界中の読者から否定的に扱われる。

そう麦の穂にとって自然は骨身に沁みるものであって、

『太陽はさんらんと輝き、木々の葉はよろこばしげにきらめきかえ

し、小鳥たちは、ああ、小鳥たちは神を讃美していた”

といったものとは異質のものである。麦はその「実」という人間の食糧の過程である。そこへ春の光や風があるのである。人間にとつて自然が嬉しいのは麦の実の成熟としてある。ドストイェフスキーの文章が世界で最も美しいのは、ただ麦の穂に吹く風への共同としてある時だけである。

その自然という植物と動物を食べて生きる人間を、即ち人間でありうるそのものを原罪という。そして農耕生産は都市の生活によって合理化され、発展させられる。農耕は政治に従属する。

麦の穂には湧き上る歓喜と神の栄光が一致している。そこでは殆ど無限の感覚と論理（言葉）が融合して、表現が不可能で、それで麦の穂は話をしない。

カラマーゾフの兄弟たちは明日、役所や会社に勤めに行かないのだからか。

寒い

（我が心からの祈り）など殆どナンセンスだから

せめて、寒さは大地の祈りであり

また砂漠も大地の祈りなのであらう

ある日？ どの日？ 次の日、次の日、次の日、

やってこない

私は空になってしまった。

それでも体は勤めに出ている。

その体が学校や病院で空にされている。私がいらない。

学校に勤めて、試験問題を作り、入学試験をして、採点、入学式といったことに空になった私の体が働いている。私の体が知識につ

いていらない。私の体は呆けている。

見えるものの汚れ 机、壁、生徒

触れるものの汚れ 机、本、黒板

なんだこれは、

「私が全世界と一切の創られたものを捨てるために、神は死んだ」
「すべてのものの中に神を見る」（エツクハルト）

そうこれは矛盾という悲劇である。

「苦しみはその深みにおいて、神からくる」（ゾイゼ）

そう、でなければ、苦しみの本質が見えない。私の向こうから。

この世は、そう言葉への惨虐としてある。歴史というのはロゴスをはじめていること。

だからロゴスの世界というのは言葉からの憎悪、被虐の世界であつて、言葉の向こうの世界である。

だから人が生きていてつて不思議なことだと思う。人には動けない所がない（ように思われ）ので、その毎度に言葉を使う。言葉は人間の動ける理由なのである。

麦は（絶対のように）動けないので黙っている。

困った、麦の頭が動いている。麦の穂が揺れている。

“ソフィアには盡が宿っている。それは思慮深く神聖であり、類い稀ではあるが多様性に富み、繊細にして活発、鋭敏、無垢にして明澄であり、侵すことのできぬ威厳を具え、善を愛し、明晰で、堂々としており、慈善や博愛の心に満ち、堅固にして揺るぎなく、つねに安らかで、万能であり、あらゆることに目配りをし、思考する純粹な霊ならばどんな霊にでもすべて入って行くのである。”

（ソロモンの知恵第七章、二二—二三）

“言葉を巧みに扱う。”（第八章、八）

と、山のように積まれる形容詞、形容詞は父権性ではなかったか。

ソフィアの霊なる娘、カタリナ

マリアの霊なる娘、カタリナ

イエスの花嫁、パリ大学の守護聖人、まばゆい美、限りなき聖。

聖、美、処女のうち、父権性でないものは処女だけである。いえ、処女こそ、王権、父権性の最たるもの。

人は、ソフィアの娘、マリアの娘、イエスの花嫁をこのように語らなければならない。困った表の穂は黙っている。

人はこうカタリナを物語り、そう物語られる聖女を信じようとした。物語ること、言葉はロゴスへの惨虐ではなかったか。

言葉は勝つような条件にのつかっている。政治家と国民、教師と生徒、医者と病人、のように言葉があつて、日本人は前者を先生という。

言葉は〈正しい〉ことを言うためにあり、そのためには社会の秩序に合っているようであればならない。〈正しい〉〈秩序〉というのは先生と被先生との関係にある。一切が関係の所には誰も存在しない。関係でない所には人間でないものが〈在る〉。人間でないものと人間の関係は〈ひとり〉である。在るのはひとりである。

この〈ひとり〉というのは〈貧しいこと〉にひとしい。

歴史には貧しいことは含まれないから、ひとは歴史的存在になることはない。言葉はそのひとりによって成立する。

親子はない、夫婦はない、友人はない、言葉ひとり。

運命が運命であるような運命ーひとり・神

神の愛？

人が気づくこと、何に？気づくことに

当然のことながら、人は自分でないものと結婚し、共同生活をす

る。これは超常現象？故に秘蹟というのだろうか。人が生きているのは自分ではないものの基礎に立つこと。人は自分でないものを生きている。

長い夜

夜明け前の寒さ

もう一度、夜は明けるだろうか

光が差してきて、物が形になるだろうか

狂気の人々の往来、その狂気が

美しい人が死んだり、運動に勝つたりする狂気のようになる

三

言葉（だから言葉のリアリティ、といってみて）は、

麦の穂が人の言葉を話してみること。

そこで、言葉、文の自立性が自然の豊饒に似るとして、その言葉は人には聞こえまい。人が聞くことが出来るのは、文の外の気配である。気配というのは豊饒の女神のように成長する。豊饒の女神というのは、言葉の気配なのだろう。

豊饒、麦、リンゴ、ブドウ、スイカ、ナス、トマト、羊、山羊。

言葉、文はうまいものに似ている。

夢の中で、本を開き文を読んでいる男がいた。

誰の文を誰が読んでいるのか

多数にでもなく、少数にでもなく、言葉は中庸に帰属し、意味は

宙にかかる。

夢の中に現れる文というのは書く者と読む者の同一性、宇宙に立

ち現れる意味？

麦はチラツと触れる。何に……。

前の道路を通勤して行く人々

職場が楽しいというのは、人が底に不幸を持っているから。

何かが通りすぎたよう（麦の瞳）

この国では物を思うことも、言葉を刻むこともなかった

人の顔も思い出せなかった、誰もいなかったから

この国に教師がいらない、から生徒もいない、二人の日本人。

多分、なんのためでもない

多分、誰のせいでもない

多分、ある心が現れるためなのだろう

（いえ、現れている心なのかも知れない）

この世の人は

問うこと と 問われること

答えること と 答えられること

話すこと と 話されること

書くこと と 書かれること

が似ている。それは歴史的証拠であると言ったら、それが歴史なのである。

と、言ってみて、私はこの世の出がけに幸福を失ってきた。歴史を

記念すべき歌もうたえず、酒ものめない。あらゆる歴史上の形容詞

もきらい。なんというあさましさだ。

「私の魂を牢獄から救い出してください。」（フランチェスコ）

と、そう（心）というのは牢獄の中に住んでいる。

歴史ではないとすると、（神）は人の観想の力の中にあつて、時代

の思潮という、学問の流派とか人間の知性とかはただ観想の衰退の

ようにある。島国には思想は成立しなかった。

観想が観想において観想するだけ。

考えることが考えることが……。

「何一つ考えるな」

「神のみに専心し、充足する」（フランシスコ・デ・オスナ）

歴史が言ってみる神秘思想。私には正気なだけである。

文学は（言葉の使用だとして）国家に恐怖している。

一方、国家という文明組織は言葉からの恐怖であろう。

言葉は、その国に於いて売り物にはならない。言葉は生きようとして、瞬間、瞬間、その瞬間毎の死のようにある。

性もまた国家化、文明化して、言葉の世界から逃れている。性で

ある限りロゴスの世界は見えなくなっている。

人が生きるといふ原罪、人が話すといふ原罪。

（謙譲と自由による祈りと観想）、それが充ちているような野。日

本の言葉にはなかった、口にするのはずかしい謙譲と自由。

言葉の話せない麦の謙譲

身動きできない麦の自由

麦の祈りの充ちている野。観想の世界。

麦の祈りと観想には具体物が何もない。

なにしろ俺は（謙譲と自由）なのである。と麦が言う。

麦が話す？ いえ麦だつて思っている。

「こうして生きていると、外側・この世とは関係ないな

いや、この世とは全く関係ないから（生きているらしい）」

神は歴史にならない（としたら）

「神は魂を愛するのであり、外的行為を愛することはない」（エックハルト）

といった風に、魂は生活（人間の生きている現象）を嫌う。人が二

人以上で生活することを、神は嫌う。神はないものの現実なのだろう。行動がないわけではなく、マザーテレサのように新聞に出ることテレビに出ること、がないのである。歴史になることがないのである。

色もない、形もない…、多分この世の死というものの世界。それで人は「神は死んだ」というのだらう。幽明のところ、忘れてしまった世界。

「隠れたるに在りて折れ」。そして何時？

朝、バーン・ジョーンズの絵？ 昼間、アルプスの谷・村？ 夜、セリーヌ？ 気温、十五度？ 二十五度？ 三十度？ 何処で？

人が考えるなんて、なにかの間違いのよう

考えると人は自己存在を限定する

何に向かつて…社会の生きる常識に向かつて…

人間は多くは忘れるものだ

先端につながる一つだけ

「人に必要なものは一つだけである」という意味

一つというのは「ない」ものことである。

それはあらゆる存在から処刑されよう。

だからまた「唯一者」などというものは「ない」ものである。

このないものは

唯一者と一人との通路であり、多分、祈りの登り口である。

枯れ縮んでいる木

木である故に。

人の目から消えてしまう

目って？ あるものとなないものの境

そう読める文と読めない文（がある）

幸福なバナナ、冷蔵庫でくさりかけている

木の皮のような野菜、冷蔵庫の中でますます強固になる

麦でないものが麦の穂になることはない

一つのほ

まだ寒いですね、北の山には雪がある

暖かくなりましたね、雨が降るかも知れませんが

石が邪魔ですね、石ばかり

人間が使う言葉を形容詞というのだろうか

麦の穂にならない人々とは、そのメカが違うのである

麦の穂のようになるには秘訣がある

メカ（秘訣）は、構造自体である

言葉みたい、言葉のメカはその構造自体にある。

麦の穂の構造自体？ って

「恐怖」（恐ろしいこと）、彼はおそれ、おののいている

恐怖は、ひとりと人類の歴史全体との関係、という関係である。

麦の穂は「それを感じている。しかし知識にはなることがない。

仕方はない、この生存の宇宙に声が聞こえるか否かだ。

声が聞こえるのは私に似ている、懐かしい声だ。

声は暖かい、いえ暖かいものは声からやってくる。
「アブラムよ、

国をはなれ、身内をはなれ、父の家をはなれて行け。
わたしの示す地まで行け」

その言葉は一番最初にある。意味を求めることもない。まして解釈してみることもない。声、それは私の存在であった、故にそれは人に一番懐かしいものであった。人は声が聞こえるか、聞こえないかだけであるらしい。

なんと、イエスが生まれたということは、ロゴスがこの世に現れたということである。

人には、いつかは神の声の中でしか言動しないような性質があるのかも知れない。神の声だけが生きる力であるように。

「アブラハムよ」と神が呼んだ、「お前の愛するひとり子をつれて、モリアの地にゆき、山の頂で彼を犠牲として屠れ」と。

祈りつて、一番いい状況は書かない

だから、祈りつて心の全部現れないものの全部

祈りは唯一の、奇蹟への参加だと思ふ

祈りはある環境に似ている
多分、その環境というのは心の形をしているだろう

「孤独と祈りはいつさいの良い行いに勝っている。祈りを獲得した人は地上のことがらを考える時間がない。人に会って彼らと話をすることは、神から彼を切り離そうとするいつさいのことと同様、

彼にとつては重荷である。」(バルフェーニイ)

少なくとも「祈り」というのは、生活上アクビをしたり、へをしたりしないことに似ているだろう。マリアの絵のようである。

「謙虚(服従)」というのは社会形態であり、意識、心理ではない。それは多分、「祈り」とは異質のものである。いわば社会性、支配的性質に属しているよう。

「真の幸福のために謙虚に喜んで労働に耐えなければならない」(フェオファレーン)として、その労働が教育である人は、生涯どんな教育に耐えて来たのだろうか。

四

現代には新聞とテレビと、それを作る人と見る人との社会しか存在しない。この社会では言葉はいつも勝つようにしか作用しない。

「奇蹟って何?」と私なりに思ってみる。

私の側に誰もいなくなること?

たとえば五時に三越の玄関で人に会うことにして行ってみると、その人がいなかった。勤務の都合であろう。人は勤務の都合で会って、勤務の都合で恋愛したり、勤務の都合で結婚したりしている。

誰もいない私は、この世とは違っている。誰もいないという奇蹟の実感。そんなことがこの世にはある。誰も私に会おうとしない。私は人の世から除外されている。

そうそう、知性は人情に似ている。学問などなくなつて美人であることができるように。

優しい言葉が話せないと知ったことにはならない。そう言葉を話せない者に「知」はない。荒げた言葉は「無知」の相互性である。

なぜ、どうしてこんなことを考えるのだろう。

〈この世には良い言葉というものがあるのかも知れない〉

〈善いもの〉 〈良いもの〉

なぜそんな奇蹟のようなものが見えるのだろう。

〈よき音づれ〉 〈福いな便り〉

授業が騒音に消され、体の疲れの中に、怨念の底に、私は〈良い言葉〉を見る。良い言葉がないとしたら、そこは〈暗黒〉である。言葉があつて、光があつて、物のかたちが見えて、だから〈暗黒〉があつて、その暗黒の故に光が見える。

会議のある日 ある所

言葉は吹かれてこない

民主主義が

ロゴスを暗黒に閉じ込める

今、時と場は、会議と民主主義の別名である

良い言葉？ 良い文？

それは、本質的には割合簡明である

社会的に、社会的判断に、正しいように立っていることだ

立っている場所？

というの也要するに本人の言葉のことである

（本人、言葉、判断という奇妙な同一性）

あるいは本人のいた時代、場所（という矛盾で）

要するに良い言葉というのは私のもの（所有、判断）である。

時間にも、場所にも分解設置されてしまった人間

もうここには統合するものが見失われている

新聞、大学入試編

一月二十七日から三月二十八日まで、一次・二次、A・B方式とかの人間区別。区別は人間というまとまりを忘れさせる。この部分性は支配構造としてあるしかない。そこには言葉の記憶も残っていない。

右の期間中、この世は忙しくて、個性も肉体的ない麦がどう育っているのかなど、人は見向きもしない。